研究雑話(38)

人間発達の物質的基礎(二):「心練学」の基礎を求めて、(2)、描画能力発達への川田の着眼。

藤井力夫

前回は、日本における障害児教育の創始者の一人、川田貞治郎が人間発達の基礎を求め、ペンシルヴァニア州立医科大学での脳神経の解剖実習を強く希望した経過についてお話しました。障害児教育研究のメッカ、ヴァインランドを去ることは経済面のみならず研究的にも孤寒を意味した。だが家系調査研究や知能検査研究ではあきたらなかった。「心練学」、今ふうに言えば《注意と認識の機序に応じた教育的援助》の開発に確信を強めていた川田にとって、帰国を前に脳神経の実習を体験しておきたかった。もう一つの勉強、描画能力の発達に関する勉強から川田における必然性と将来への優位性についてお話したい。

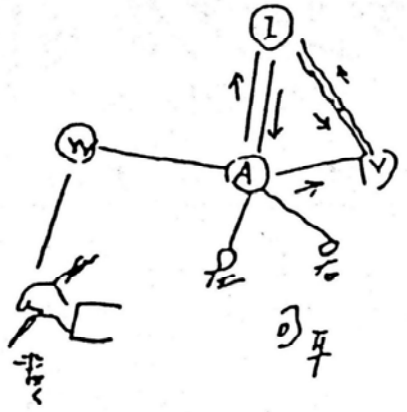
図Aは、書字のときの脳における各部位の役割。川田は好んでこれを図解した(大正六年二月十三日付け書簡)。視覚中枢(V)と聴覚中枢(A)、それに表象の連合中枢(I)及び書字の運動中枢(W)、これらを想定。障害児はこの連絡において未発達だとする。理解の手助けとして間違いではない。川田は神経系における結合の問題を知りたかったのだろう。神経伝導が接続ではなくシナップス部での接触によるとする説が、受け入れられたばかりであった(ラモニ・カハール、一九〇六年)。ひと味違う新しい流れを感じとっていたに違いない。

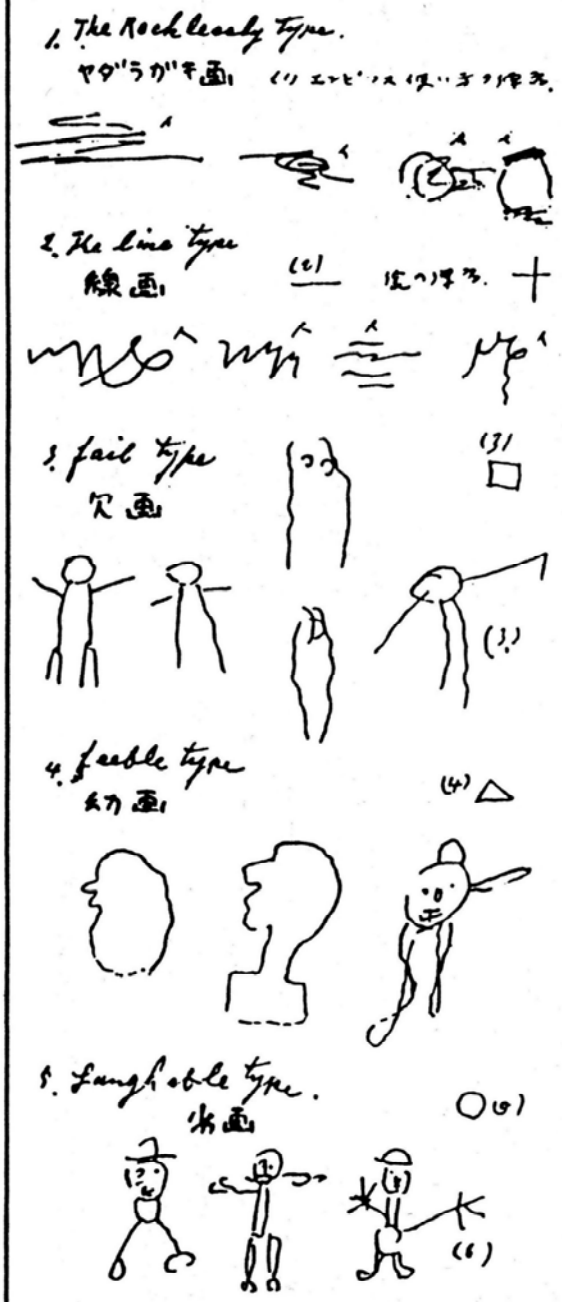
では、どのように結合されていくのか、発達についての理解が重要。その一つの手がかりが描画能力の発達であった。図Bは、同年一月二十三日付け書簡。描画能力の発達に関する自らの解釈が楽しかったのだろう。考えたこと、発見したことをいろんな角度から妻とく子に書き送っている。妻に対する共同者としての期待も語られている。

①肩と肘で描く「なぐり書き」の段階。②手首の動作が必要となる「線画」の段階。③そして円を描く手を止めれるようになる。りんごやお母さん、明確なイメージを予めもって表現できるようになる飛躍の時期。が、「欠画」。④図式的にどんどん描く「幼画」。この期の特徴として、川田は三角模写に注目。書字への移行にあたっての基本として三角模写に着目したおそらく日本で最初の人物だろう。最後は、⑤螺旋的になかなか発展できない障害児の描く「劣画」。前の四つの段階を経てはじめて可能。こう把えるのであった。

(北海道教育大学教授)

A.



(A) Auditory Word Centre
(V) Visud Word Centre
(M) Mortor Word Centre
(W) Writing Centre
(I) The group of memoreis association the Idea which the word repressents

B.